# 第九回　家村中佐の兵法講座 ― 楠流兵法と武士道精神

平成二十五年四月二十七日

## 楠正成一巻之書（抜粋）

### 大将（たいしやう）衆（もろもろ）を下知（げち）に随（したがわ）しむべき事（こと）

大将は多くの兵たちを下知（命令・指示）に服従させなければならない。軍陣にてそれぞれの兵卒を使うのは、平素に人を使うのと同じことである。君臣の道は、平素も軍陣も変わるものであってはならない。しかしながら、戦（いくさ）に馴れていなければ、将も兵卒も共に血気盛んになって平常心を忘れ、兵卒らは将の命令や指示を聞かず、将は戦に勝つべき道理を見つけられないがゆえに、軍の備（そなえ＝配備）をみだりに変更して、必ずや敗れるものである。これを闇主（あんじゅ）盲将というのである。また、良将（優れた将軍）は言行ともに平素と変わらず、戦に勝つべき道理によって兵卒を平素のごとくに使うので、兵卒の血気も冷めて百万の大勢力であっても将の命令に従わないという事がない。兵卒が大将の命令に背くことがないときには、未だ戦の訓練を重ねていない兵卒であっても剛毅な兵である。源頼義が「他軍の実戦に馴れている兵卒と我が軍の実戦を経験していない兵卒とで合戦しても勝てる術がある」と云っていたのがこれである。源義家が「農工商の三民を率いて、愚将の下の剛士（強豪の兵士）に勝てる道がある」と云っていたのもこれである。新田義貞は寝起立居（ねおきたちい）において常に兵卒を練磨していたが、これもまた平常をもって軍法に活用したのである。また、武道の妙という事がある。戦は、道をわきまえた人も無道の人も勝ち、理を欠いていても勝ち、道理に適っていても負け、大勢も負け、小勢も勝ち、勇剛な者も負け、柔弱な人も勝つものである。これらは皆、あってはならない事だけれども、戦（いくさ）に限っては有りうる事なのである。武道の妙を知っているのと知らないとの二つである。このことに思いを致して創意工夫しなければならない。

### 心（こころ）の四武（ぶ）の事（こと）

心の四武という事がある。これは、大将が四武に心を付けておくことである。心の四武が無ければ、伏兵や夜討ちにより裏をかかれた時に不慮の敗軍をするものである。心の四武が無い備（そなえ）は、戦（いくさ）に心を懸けていないがゆえに抜け殻のようなもので、物の用に立たないものである。これゆえに将は飲食や寝起きの間も心の四武を忘れることがあってはならない。これは戦の重要な秘事である。源義家は四武の外に四隅を加えて八陣の図がこれであるとし、義経は八方と云った。それでも天と地の二つ隙間がある。備に隙間があってどうしてよいことがあろうか。四武六花の陣を正成が義貞に相伝した時、八陣も四武六花も細かにして粗く、本を失って末を論じていたが、これは皆、論じ過ぎて誤りがある。心の四武を正しき伝えであると伝授してこれに付き従う。心の四武は秋毫（とんほう＝ほんのわずかなもの）の通る程も隙間がなく、言うなれば真円なる形と知らねばならない。よくよく考えをめぐらして深く研究すること。この心の四武は目に見えず、耳にも聞こえない敵を防ぐためである。目で見て耳で聞くような敵など恐れてはならない。勝つべき謀（はかりごと）があり、負けない備というものがあるからである。むしろ畏怖して敬い慎むべきは、利益や恩恵に耳目を傾けることがない敵である。戦を心に懸けることがない敵は敗軍の相である。心の四武というのは、戦を常に心に懸けることである。

【参考】私が毎度用いる「四武」は、第一には「奇兵」、二には「伏兵」、三には「陰兵」、四には「鳥雲」である。「奇」というのは常々いうところの奇ではない。有るものを無いようにし、無いものを有るようにして、我が形情を敵に知らせない。また、有るものはそのまま有り、無いものはそのまま無いようにして、真偽相半ばして敵が判断したり決心したりすることが出来ない。こうした用兵を「奇兵」という。「伏」というのは、すなわち径路に兵を配備して我軍が敗れて退却するのを救い、あるいは疲れている味方を助け、新たな部隊が投入されるまでそれに代わって勝機（チャンス）を保持す

る軍勢である。「陰兵」というのは、敵の不意に備える軍勢である。敵の間にも味方の中にも、山林村落にも、居場所を定めること無くして、合図によって兵を発するものである。「鳥雲」とは変化が窮(きわ)まり無く、集散に常なるものがない用兵である。鋭い士卒、衝撃を与える騎馬、有利な態勢にある兵を時機に応じて連続不断に発し、決して窮まる所を示さないものである。私の生涯の軍(いくさ)は、皆この「四武」を宗とする。(河陽兵庫之記四　奇備より)

## 備の四武之事

備(そなえ)の四武について述べる。隊伍の組方、人の配置、長い短い、方形円形といった備は、地形や敵の強弱によって異なり一定ではない。しかしながら、良将は何れの場合にも心の四武をもって備を立てる。それゆえに平野に良い備を立てる者は、山にも良い備を立てるのである。ただし、開き合いの心得というものがある。備は後陣(ごじん)から先陣まで見通しがきいて軍使が往来し易く、敵の備の全貌やその動きが見えるように開き立てねばならない。**一**　すなわち、この心である。また、小屋の取りようは、夜討ちに討たれないように開き合わせて構え取らねばならない。**二**　すなわち、この心である。夜討ちは討って通り抜けるもであるから、横合いの小屋取りという事が必要である。これも皆、四武である。ただし、村里の民屋に陣を敷いてはならない。小さな利のために、大きな損をもたらすことになる。

## 地形三つの見分の事

地形の三つの事とは、「利・鈍・平」である。この区分のうち、「利」は味方にとって良好な地形であり、戦いに便利である。「平」は互いに勝ち負けがある地形である。「鈍」は味方のために悪しき地形である。このように地形を見分けることができれば、備(そなえ)の立て方も定まり、出でて戦う所があり、受けて戦う場がある。

## 常に心得べき謀の事

謀は素早く準備を調えることが肝要である。日数を経てしまうと虚実が顕れてしまうものである。秘密が漏れて多くの人に聞き知られてしまうと、かえって敵に謀られることになる。疾(素早いこと)は即ち功ありと云われるが、総じて戦とは調練の賜物である。謀が成功すれば勝ち、謀が成功しなければ負けるのである。例えば石を用いて卵を破るのは、石の堅さによるのではなくて、卵が軟らかいことによる。このようなことに謀は不要である。鋼(くろがね)を用いて鉄を切る、これこそが謀というものである。これゆえに、謀は大事なものである。真実を以て謀るのに偽りになることがある。変を以て謀るのに常になることがある。真偽常変は定まることがない。それゆえに、たとえ大智広才の人(多くの知識があり、幅広い才能の持ち主)であっても、軍隊の指揮については及ばないところがあるのだ。そのように言われる理由は、(軍隊の指揮が)多いか少ないか、浅いか深いか、奥か端かによるものではなく、敵により、時により、地形によるものだからである。例えば、鳥を捕るようなものである。大きな鶴は、小さな雀を捕る網にはかからず、また雀も鶴を捕る罠にかからない。鵜であれば川で使い、鷹であれば山で使うものである。これが軍法の常である。孫武(孫子)は冬の日に物を洗う女の手が凍えないのを以て軍法に用いたということが云われている。これのみに限らず、良将が微に入り細に入り心掛けているのは平生の事である。飲食や寝起きに至るまで軍陣(戦における陣中)で活用できない事は無いのである。心得ておくべきことである。

(付記)謀は「慣れて狎れるな」と云うことがある。敵の心を奪うという術である。損失が少なく利益が多い謀があれば、早速になさねばならない。これが敵を悩ます事になる。

(付記)謀は戦に勝つための道である。逆に取って順に治めるのである。先に勝つということが第一である。

## 戦場に出て心得べき事

軍陣においては心を天地にめぐらし行動(手立て)を定めねばならない。心も行動も変転する時には、戦において粗雑な事があって兵卒を多く損するものである。粗雑な事を嫌うということによって実(充実した状態)

となるのである。

また、軍陣において常に云う事を忘れてはならないともいわれる。大将の心を本分(本来の姿)に還し、心を支配しているものを抜き去り、一時の暗闇が明るくなるときには、兵たちの気も定まって、冷静にして平常のようになるものである。戦いが始まる時は将兵ともに血気が上がり、前後左右が分からなくなることも一時はあるものだ。一時が過ぎてしまえば将兵ともに戦に慣れて、臆する心がさっと失せ、勇気に満ちた本心が出てくるものである。平生でさえ尊貴の人の前に始めて参会すれば、その人に向かっては臆するものである。まして軍陣において臆さないことがあろうか。戦は初めてのときは闇夜のように勝負の有る所をわきまえず、二度目は月の夜のようであり、三度に及べば夜が明けたかのようである、と云われる。それゆえに、戦に慣れればいよいよ血気を覚えて勝負を知るものである。これが中ぐらいの勇気のなせる業である。上の勇気や下の臆病は論ずるまでもない。このほかにも総じて勇気に「曲(くせ)」と云うことがある。耳が臆することがある。これは事を聞いて恐れることである。目が臆することがある。これは敵を見て恐れて気色を変ずることである。言葉が多いことがあり、無言になることがあり、機嫌が良いことがあり、うかうかとして悩んでいるようになることがある。これらは皆、血気に侵されて平常心が変化しているのである。この形相が一時の間であり、武勇が出でて剛毅をなす、これを曲と云うのである。この形相から本来の勇気に還らないのを臆病というのである。これを治療する薬があるが、これについては省略する。

また、大将が討死をのがれるため、剛力、勇健、歩行達者で気が潔い歩兵の二十人から三十人を大将が進んだり退いたりするのに応じるようにして馬の周りに連れていることがある。いずれも高価な兵具を持たせている。総じて軍陣に不釣合いの兵具を持つことは命を亡くすことに繋がるものである。敵に勝てるような術もなく、かつ無用に重たい。これらは心掛けの薄い愚兵(ぐひょう)のなすわざである。将兵ともに知っておくべきことである。

さらに、戦に必ず勝てると思われる謀は少ないものだとも云われる。負けてしまう事は多いものである。よくよく心に留めておかねばならない。

## 十死一生(しせいかっせん)の合戦の事

十死一生の合戦というのは、重大な結果をもたらす謀である。これをやり遂げることができれば敵を滅亡させ、やり損ねたならば味方が滅亡するので、くれぐれも慎重に判断すべきものである。例えば、大河を一つも二つも越えて敵の思いも寄らない方向に進出し、あるいは深い山を回って敵の後に侵攻し、あるいは敵が進出してくる道の前方で出合い頭に敵を討ち、あるいは二日や三日の路程で敵地に入って野中に兵を伏せてから不意に急襲して戦をし、あるいは夜討・朝駆け等である。いずれも皆、敵の大将の本陣を討つことを心掛けてなす謀である。昔、源義経が一の谷の城を落としたのは、播磨から回り込んで鵯越(ひよどりごえ)を敵城内へと落とし入りて勝ち、また義経が屋島に向かったとき、大風大波に船を出したのであるが、これらは皆、十死一生である。謀発不意(謀を発して不意を突く)と云うのが十死一生の事である。

## 鳥雲(ちやううん)の陣の事

武勇があって死することを恐れない有能な兵(つはもの)からなる敵は、小勢であっても強いものである。このような敵を討つには、鳥雲の陣が効果的である。この陣は、多くの場合、岸や沼などの節所を前にして味方の本陣の備を堅くし、足軽の兵により射立てて、敵が攻めかかれば鳥か雲のように引き、敵が引けばこれに追随して、(兵を)入れ替え、入れ替えて反復して小刻みに突き続けるものである。これにより敵を疲れさせてから討つことができるのである。もしも敵が我方の陣へ攻め入ろうとしても、少しも備を乱してはならない。前に節所があるので攻め入ることはできないのである。平地であれば堀と笹垣を構築して戦わねばならない。この方策は負けることがない謀である。この謀は、戦のたび毎に用いるべきである。人工的に作る節所さえよく考えて判断すれば、地形にかかわらず成功することである。これは負けない備である。その利は深いものであるが、これについては省略する。

## 兵（つはもの）の能（のう）の事

兵の能力とは、弓馬、太刀切り、早業、水練、山野の歩行であり、これらを嗜まねばならない。兵に限らず将軍もこのような能力があれば、不慮の討死をしないものである。これらは若年の内に習わねばならない。また、将軍はこれに慢心して人を恐れず、軍勢の先頭に立ちたがるならば、命を失うことになる。さらに軍の兵卒も下知（命令）に背いて、備も乱れがちになるものである。それゆえ将軍は兵としての能力を裏にして、表には将としての能力を嗜むべきなのである。太刀打ちは一人の敵と向き合って人を殺す能力であり、将軍は団扇（うちわ）一本で戦に勝つ。これこそ将軍の能力というものである。

## 人を知べき事

人を知らねばならない。人の心は様々であるから、明聖、亜聖（聖人に次ぐ立派な人）、大賢でさえも未だに尽されていない事がある。それゆえに、天下国家の主であるといえども、近習（きんじゅう＝主君の側近で奉仕する役）の五六人と奉行頭人（幕府の役人）の賢愚・佞奸・利欲・私欲を悟ることができれば、万民もまたそれと同じようなものである。このことを知っているのを明将と云うのである。また、闇主（あんしゅ）は我が郎党が善である（優れている）のを知らず、他の郎党が悪である（劣っている）のを誉め、兵卒の勇ましいのを将となし、心が定まっていない者を頼もしい兵だと云い、偽者であるのを有能な人と思い、血気に走ったために死んだのを定死（戦にため止むを得ない死）と思い、定死を逃れたことをも誹（そし）らず、愚かな死を勇ましいと思い、主の下知を聞かずに我が身のために死んだのを忠節と思う。これは皆、武の道を知らないためである。死するにおいて、いろいろな武道の詮議（検討して物事を明らかにすること）があって当然である。事に臨んでは女も心よく（快く）死ぬものである。武の道における死は志をもって忠節を顕わし、家を失い、名を捨て、主君のためには定死をも逃れない。これが義であり道である。また、盗賊の勇と云って、山賊や海賊のごとき利を手に入れようとして卑しく死ぬような事は皆、武の道においては無謀の死であって、これを勇とは云わない。将は将の道を知り、兵は兵の武芸を習うのは、ただ命を全うして名を高めるためである。死ぬことだけが武道ならば、誰が武芸を習うだろうか。生死の二つについて、詳細な詮索があってしかるべきものであるが、闇主はこれを悟らない。よく心得ておくべきことである。また、武勇があって賢い人がある一方で、臆病でも賢い人がある。これは謀反をする者である。また、将軍の下知に随って敗軍の時に一番に引き返すのは、忠であり、勇である。将軍の命令に替わるのは忠であり、義であり、勇である。将軍の下知が無ければ抜け駆けするのは、不忠である。

（付記）将の器にあらざる者に謀を俄かに教えて行わせると、戦は危うくなり、事は成功しないものである。

将の器である者は、言葉は少ないが要を得ているものである。人を知ることは、武の肝要である。

## 軍法（ぐんぱう）八箇條（かじやう）の事

軍法は、親疎を選ばず、法に背く者であれば早急に罰しなければならない。それによって得られるものは多々ある。

一に、軍法が乱れれば備も次第に整い難く、見苦しいものである。
二に、先陣が敗れた時に、後陣によって勝つことが難しい。
三に、先陣が戦わない以前に、後陣から逃げ崩れるものである。
四に、諸陣に陣雷がついて騒がしく、将の下知（命令）を聞きつけない。
五に、自分一人の高名を心に懸けて、合戦の勝負を心に懸けない。
六に、諸兵が大将を軽んじるために、謀が成り立たない。
七に、懸け引きを心々にして浮き足になり、備が崩れ易い。
八に、勝ちいくさには強いが敗ければ弱くなり、返すことができない。

この外にも損失がある。大将は軍法を正しくするのと人を知ることが肝要である。